

## 24. ガス壊疽患者に対する高圧酸素療法

中川義宏 恩田昌彦 森山雄吉  
 埴原忠良 田中宣威 徳永 昭  
 笹島耕二 滝沢隆雄 吉安正行  
 古川清憲 京野昭二 松田範子  
 宮下正夫

(日本医科大学第一外科)

ガス壊疽は比較的稀な疾患であるが、ひとたび発症すると重篤なる全身症状を呈し、抗生物質の大量投与、適切なる外科的処置、嚴重なる全身管理を行なってもなお死亡率が高い疾患である。

私共は、昭和50年以來37例のガス壊疽患者に対して高圧酸素療法下に治療を経験したので、その概要と治療成績について報告する。

症例は、男性22例、女性15例で、年齢16歳～74歳、平均45.2歳、37例の内訳としては交通外傷12例を含めて外傷に起因するものは29例と多く、非外傷8例であった。発症迄の期間は、外傷によるものでは1日～8日で、平均4.3日であった。症状として発熱、発赤、腫脹緊満、強い腐肉臭、握雪音などの臨床症状を呈し、レントゲン写真上では、皮下及び筋肉内のガス像が認められた。細菌学的検索では、*Clostridium* 属、*Serratia*、*Pseudomonas*、*Proteus*、*E. Coli*、*Enterobacta*、*Klebsiella*、*Staphylococcus* 等であった。

治療法は、抗生物質の大量投与、外科的処置(創の開放、デブリートマン、患肢切断)、並びに高圧酸素療法(3ATA、1.5～2時間、純酸素吸入)を行なった。高圧酸素療法は、1日1～3回、総回数1～36回、平均10.8回行なった。これらの治療成績をみると、有効と思われる症例は31例で、有効率86.1%、何らかの原因で中止した症例は2例、無効4例であった。なお無効4例全例が死亡している。その他の併用療法として4例に血清療法が行なわれた。

以上ガス壊疽患者37例のうち有効例が31例(有効率86.1%)と高率なことより、本症患者に対しての治療法としては、抗生物質の大量投与、外科的処置(創開放、デブリートマン、患肢切断)もさることながら高圧酸素療法が必要不可欠な治療法と考えられた。

## 25. 潰瘍性大腸炎に伴う右下腿壊疽性膿皮症に対する高気圧酸素療法の効果

井上卓也 山本五十年 澤田祐介  
 (鹿児島大学医学部附属病院救急部)

血管病変に伴う難治性潰瘍や壊疽性病変に対する高気圧酸素療法(HBO)の有効性について従来より多くの報告がある。しかしながら、潰瘍性大腸炎に伴う皮膚病変に対するHBOの効果についての報告は少ない。今回、潰瘍性大腸炎に伴う右下腿壊疽性膿皮症の稀有な一例を経験し、HBOの効果につき検討したので報告する。

【症例】患者は、昨年より約14カ月間、近医にて潰瘍性大腸炎に対して、サラゾピリン®とプレドニン®を長期投与されていた。1988年4月、軽度の右下腿擦過創を受傷したが、次第に悪化し、10日後某医へ転院した。転院時右下腿前面に5cm×7cmの感染創を認め、保存的局所療法を行うとともに抗生剤を投与された。しかし、創辺縁より急速に壊疽性病変が拡大(16cm×22.5cm)し全身状態悪化したため、1週間後外科的デブリードマンを施行するとともにPC-G投与が行われた。術後、創及び全身状態は再び悪化した。免疫能検査ではOKT 3、4、8、リンパ球幼弱反応、免疫グロブリンに異常を認めなかった。3週間後第2回目のデブリードマンを施行するとともに、サラゾピリン®、プレドニン®及びPC-G、CMZを投与した。更にその翌日より、当科にてHBO(2.5ATA)を連日12回施行した。その結果、創の肉芽形成が進み植皮術を行うことが出来た。

【考察】潰瘍性大腸炎に伴う壊疽性膿皮症は血管炎が基礎にあるとの指摘もあるが、未だその原因は明らかでない。起炎菌が同定されないことが多く治療に難渋する壊疽性病変の一つで、患肢切断に至ることも少なくない。その主な治療法は従来から原疾患に対する強力な薬物療法と抗生剤投与及び外科的デブリードマンなどの局所療法である。今回、我々は、HBOを適用しその効果を検討した。HBOにより創は著明に改善し、壊疽性膿皮症に対するHBOの有効性が示唆された。